

精神科医の思うこと②③

「遠くの街に住む」ということ

松村 奈奈子

コロナも少し落ち着いて、ふらっと八ヶ岳の見える高原に旦那とドライブ旅行に。11月は紅葉も終わりかけで、入ったカフェではスタッドレスタイヤの話題で地元の方が盛り上がるなど、冬がもうそこまで来てる感じです。美味しいソフトクリームで有名な清里の清泉寮のテラスから富士山や南アルプスを見ていると、授業をさぼってソフトクリームを食べに来た学生時代の事を思い出しました。実は大阪育ちの私、山梨で6年間の医学生時代を過ごしました。甲府盆地の下宿の窓からも、富士山が見えました。大阪から遠い山梨での下宿生活、「文化が違うなあ」と驚く事も多かったですが、楽しかったです。

しかし、このコロナ禍、診察に来た関東から来た学生が「やっぱり関西は合わないです」と大学を辞めてしまう事が続いたので、今回のテーマは「遠くの街に住む」ということ。

「遠くの街に住む」には、初めの数か月はパワーがいるなあって思います。

山梨の大学では大阪出身者の学生は私ともう1人だけで、8割が東京を中心とした関東地方出身でした。入学直後は1人であるのが不安で、とりあえずクラブに入り先輩と話したり、週末は同級生と遊んだり、半年ほどはネットワークづくりに必死でした。とにかく「気の合う友達」を見つけなきゃっと思いました。全く知らない街での生活は、頼れる人を探す事がスタート。次第にバイトを紹介してもらったり、バイト先でまた人とつながったりと、山梨での生活も居心地のいいものになっていきました。

こんな山梨での生活は好きでしたが、就職先を決める時には「関西で仕事したい」と思い、京都で就職しました。「お出汁」は関西風が好きだし、大阪の幼馴染と時々遊びたいしなど細々とした理由以上に、関東の人は嫌いますが、関西人のちょっぴり「ずけずけ言う」ともとれる「人との距離」の近さが好きでした。京都に就職して出勤初日

のお昼休みに、同期の仲間と雑談を始めると、すぐ冗談が飛び交って笑いが起こった時に「ああ、この会話の流れが落ち着くわー」と感じた嬉しさは忘れられません。

そこで「関西が合わない」と診察室にきた大学生。

私も結局は「やっぱ、関西が合うわー」と山梨から関西に帰ってきてしまったので、気持ちはわかります。コロナの前なら「せっかくだし4年間、異文化交流してみたら」「関東人同士でつるんだら」なーんてアドバイスもするところですが、なんせコロナ禍、「うーん」となっちゃいます。コロナで、zoom 授業とクラブ活動自粛、対面授業もあつたりなかったりで、新しい街に心地よく生活するための基盤ができないのは、ほんと大変。コロナでバイトも思ったように見つからないし、ネットワークづくりが難しいのは十分理解できます。

ただ、コロナ前から「関西人嫌いです」「合わないんですよー」って診察室でいう学生は結構いました。でもそう言いながら、結局それなりにネットワークを作って、みんな辞めることなく卒業して、地元就職していきました。しかし、このコロナ禍は、「いったん地元で考えてきます」と長期休学したり「再受験します」と辞めてしまう学生が増えたように思います。「関西が合わない」という言葉の通りというより、合うも合わないも、ネットワークづくりもできず、なにも体験できない状態が続いていて、「関西にいられない」「遠くの街には住んでいられない」という感じなのかなって思います。

マスクでもよく報道されているように、コロナ禍で仕事や進学で「遠くの街に住むこと」になった人々の孤独は、解決の糸口が見つからず、コロナでより際立ってしまっているなど実感しています。

一方で、「遠くの街に住むこと」の選択にはいろんな理由があると思います。

実は、私の弟も関東の大学に進学しました。その後、弟に「なんで関東の大学にしたん？」と聞くと「家におったらあかん気がしたんや」「遠くにいかなあかんと思ったんや」と答えた時「なるほど、あんたもそう思ってたんや」と驚いた事をよく覚えています。仕事で忙しい父との関係もあり、母親は子供にやや過干渉でした。受験前に2人で話したことはなかったのですが、「家をでて自由になりたーい」という思いが2人の進学先を関東に決める要因になっていたのです。いやー、ほんと親と離れてよかったです。残された母親は「犬」を飼い始め、父親も仕事が落ち着いて夫婦2人で過ごす時間が増えたようでした。振り返ると、「物理的に距離をとる」事で家族がいい感じに変化できたと思います。

全国には多くの大学があり、よほどのマニアックな学部の希望でなければ、それぞれの地域に選択できる大学は存在します。就職もある程度は地域を選択できる時代です。患者さんの生活歴を聞きながら、「遠くの街に住むこと」を選んだ人には、必ずその理

由を聞く事にしています。そこには親子関係の問題を含め、治療のヒントになる話が出てくる事が多いからです。もちろん「都会で生活してみたかったから」という理由が、1番多いです。しかし、初回の診察で「実は小さい頃、父親に身体を触られていたことがあって、ずっと離れたいと思って関西の大学にきたんです」と涙を流して話す女子大生や、「父親の暴力が嫌で、家を出ました。国立大学なら、下宿代を出してやるっていわれたので」と話した男子学生など、そのような「離れた街に住む」理由が、頑張ってきた子どもの話を聞くきっかけになる事は多いです。

もちろん、進学で「遠くの街に住む」事ができるのは、家族の経済力や本人のパワーが必要で、すべての子どもができる事ではありません。児童相談所で診る子どもたちは、経済的に厳しかったり、父母から離れるエネルギーも削ぎ取られた子供たちがほとんどです。ただ、「遠くの街に住むこと」ができた子供たちが、ちょっとしんどくなって診察室に来たときは、話を聞きながら応援をしたいと思っています。

大人の患者さんでも、仕事や結婚などで故郷と離れたところに住む事はよくある事です。しかし、「遠くに離れて住む」だけでなく故郷との交流が途絶えていたりすると、そこには過去の家族関係が反映した距離があるんだなあと思います。交流の途絶えた親子関係の時には「やっぱ、ちょっとしんどい御両親だったんですか？」と尋ねてみるようにしています。「そうなんです。いい思い出がなくて・・・」「両親とも怒鳴ってばかりの人で、ほめてもらった事がなくて・・・」と話し始める内容からは、治療の糸口になる対人関係の問題が見えてくる事が多いです。「物理的に遠くに住む」事に気になる理由がある事が多いですが、「心理的に遠くに離れる」のも、様々な理由があるなと思います。

しんどい時、もし動けるなら、少しでも自分が楽になれるように行動すると、心は安定します。「少し離れてみる」のは健康的な動きでもあるんだな、と思います。

久しぶりに、山梨の美しい山々、星いっぱい夜空を眺めていると、30年前にワクワクして下宿生活を始めた時の事を鮮明に思い出しました。私は「遠くの街に住むこと」を体験できて、多くの事を学んだなあ感謝の気持ちでいっぱいになりました。